2012 年 11 月 28 日

日税メールステーション特別号

～海外ビジネス情報～

あるビジネスマンの「アジア出張記。」

アジア新興国"ＣＬＭＢ"の一角を担う、カンボジア

第２回目の今回から、いよいよ出張先の各国について記していきます。今回はカンボジアです。

(プノンペンの街並み)

■Why Cambodia?

アジアの中でも新興国として注目を浴びてきている、"CLMB"の"C"がカンボジアです。

カンボジア、ラオス、ミャンマー、バングラデシュの４国で"CLMB"と称されています。中国、インド、ベトナムなどは、すでに各国の進出とともに発展が進み、人件費が高騰していることは周知ですが、知人から聞いたところでは「人もスレてきている」ということです。

これから新規でアジアの国の展開を行うにあたり、困難はあるにしても、伸びしろが大きい新興国のほうがより大きなチャンスがあります。カンボジアの魅力は、人件費の安さはもちろん、電気や水道などのインフラが相応に整っていること、金銭の出し入れが可能なこと（国によっては、資金が入る分には構わないが国外に出すのは難しいという所があります)、法整備などがこれから行われていくことに対する期待、などもろもろありますが、当地の経済の有力者との伝手があったこともカンボジアを選択した要因です。

実際には上述の有力者(以下パートナーと記述)との共同出資により現地法人が作られました(注)。この法人を作る前から、パートナーは色々な企業から接触を受けたそうですが、

・自国の利益優先志向がはっきりと見える中国、韓国よりは日本がよい
・日本の大企業は動きが遅いため、
迅速に決定して事を進める中小企業に期待をしている

ということが評価されたそうです。
このようにして、2012 年初頭に設立されたのが、Shibatu Sonatra 社です。社員数 10 名足らず、20 代社員が大半の、文字通り若い企業です。
注）Shibatu Sonatra 社は正確には当社のグループ企業ではありませんが、関連の深い企業であるため、本コラムにて取り上げております。

■カンボジアで行ったこと
カンボジアには、Shibatu Sonatra 社にからめて本年中に複数回出張へ行きました。

業務としては、
・開発プロセス整備のコンサルテーション
・現地の企業訪問
・採用面談
を行いました。

弊社は IT スキルやビジネススキルのトレーニングを主体としたサービスを提供していますが、お客様の課題解決の一環としてコンサルテーションを行うこともあります。Shibatu Sonatra 社はカンボジアの金融系企業グループである Sonatra グループの中の IT 企業として活動を開始しましたが、全てがゼロからのスタートです。

IT(ここでは、コンピュータシステムのプログラミング開発が該当します)の世界では、"開発プロセス"なるものが非常に重要です。開発プロセスとは、簡単に言うならば、"作業手順や成果物の取り決め"のことです。システム開発・プログラミング開発は、要件定義・設計・プログラミング・テストなどの工程を踏み、それぞれの工程の中でもさらに副工程に分かれます。どの工程をどのような手順で進め、何を作成するのかが明確に定まっていないと、システム(プログラム)の作成はまずできません。

生まれたばかりの Shibatu Sonatra 社は、まず Sonatra グループで使うシステムの開発を最初のプロジェクトとして手掛けましたが、開発プロセスなどは整備されておらず、手探りで開発を進めていました。そこで現地に足を運び、現状の把握と手掛けている開発の性質を理解したうえで、同社に合うプロセスの全体像の絵を描き、急務な工程の成果物と作業手順を定義しました。

文章で書くと簡単ですが、この作業自体は非常に困難でした。
日本語で日本の企業に対して行ってもなかなか決めることができない内容を、異国の企業に対して行うわけです。はじめのうちは通訳を介していましたが、システム開発の専門的な話であるためその分野

の知識がないとうまくはいきません。
　こちらも熱が入り、結局は決して得意とは言えない英語を、筆談を多分に交えて用い、何とか進めました。オフィスを辞去する時にはもうヘロヘロでした。

　現地の企業は、大学なども含めて５か所、午前に２件、午後に３件と、詰め込んで訪問をしました。日本の営業では、これくらい客先まわりをすることは珍しくはないでしょうが、現地の感覚としては異例で、仕事で営業をする場合でも「午前に１件、午後に１件くらい」と言っていました。現地の日本人マネージャいわく、

　「日本人の感覚に合わせようとすると、指導にかなりの手間がかかる。
　　言った直後はとりあえず動いてくれるが言い続けないと継続しない」

　とのこと。

　なお、現地企業のアポは Shibatu Sonatra 社の若き COO が取ってくれました。
　日本では、全く付き合いのない企業に訪問のためのアポを取ろうと連絡をしても袖にされることが多いものですが、あっさり OK が出ているとのことで非常に驚きました。実際にはアポがうまく取れておらず、相手先に着いてから事情を説明した企業もあったのですが、ちょっと怪訝な顔をされたものの、結局は相応の時間を割いて社長が相手をしてくれました。このあたり、まだスレていないことの表れでしょうか。

　グローバルビジネス上、カンボジアの強みは「賃金の安さ」「ビジネスでは英語が使える」「これからの成長見込みが大きい」ということが挙げられます。技術力はベトナムなどと比較して劣るようですが、それをおぎなって余りある労働賃金です。
　カンボジアの事実上の通貨は米ドルで(※現地通貨としてリエルがありますが実際には米ドルが主流です)、若い技術者の一月の給与は 300～500 ドルくらいです。技術力が相対的に高くはないとはいえ、日本の賃金の十分の一ですから、労働力供給という観点では到底かないません。
　他にも、真面目さ、奥ゆかしさなどを持ち合わせている点で、性格面で日本人に合いそうだというのが我々の実感です。

　採用面談にも立ち会いました。
　要件は、日本語ができることと、IT に関する業務経験または大学での専攻があること。

　３人と面談をし、結局は採用には至らなかったのですが、志望理由として全員が異口同音に「今の職場では自分の成長が見込めない」「IT はこれから成長が期待できるのでその場に身を置きたい」と答えるのです。日本語ができるカンボジア人が日本と取引のある企業(非 IT 業種)に勤めても、通訳・翻訳や日本からの注文の窓口事務作業だけという人が結構いるようです。

いずれにしても、明確な希望や夢を持ち、実現のために行動に移しているという人が多いです。Shibatu Sonatra 社の 20 代前半の女性社員は、「10 年後は私は社長になる」と公言してはばかりません。
「あなたの夢は何ですか？」と逆に切り換えされた際にちょっととまどってしまった自分を恥じたというのはここだけの話です.....
なお、人材紹介のエージェントが、日本人と全く変わらないほどの流暢な日本語を話すため、志望者がかすんで見えてしまったというオチがあります。プノンペン大学で学んで、日本には短期間来たことがあるだけということでしたが、まったく驚きました。同じように他国語を操る日本人はどのくらいいるものなのでしょうね。

■カンボジア食事事情
海外出張の楽しみの一つが食事です。
初渡航した日の夜、現地では高級な店へ会食に招待されました。カンボジア証券取引所上場第一号が出た日と重なり、そのお祝いも兼ねてちょっと贅沢な夕食となりました。
カンボジア料理ではなく中華だったのですが、鳩の丸焼き、ガチョウの脚、すっぽんのブツ切り、ワニの肉など、普段あまり口にしないものが並びました。鳩の皿には、飾りのつもりなのでしょうが、ちょんぎった頭が並べてあり（もちろん火は通してあります)、肉自体には少し臭みがありました。
ガチョウの脚は、現地ではお祝い事があった時に食べるめでたい食べ物とのことです。ゼラチン質であまり味はなかったのですが、脚の鱗(?)の部分を歯でこそぎ落としながら食べました。すっぽんのブツ切りは、骨だか甲羅だかが多く、ちょっと食べにくかった印象が残っています。

私はワニは食べなかった（皿が回ってこなかった.....）のですが、同僚のH氏には衝撃的であったらしく、翌日 Shibatu Sonatra 社の社員に

「俺はワニを食ったんだから、日本に来たらタコを食え！」

とのたまわっておりました。

結局、一番口に合ったのが青菜の炒め物であったという、何とも振る舞い甲斐のない我々でした...
（念のための自己フォロー：フランス料理の店に連れて行っていただいた時には牛肉のステーキに、現地で採れるグリーンペッパーの実が入ったソースをかけていただきました。緑色の胡椒の実が丸のまま入っているのですが、辛すぎず、実によい味のアクセントになっていました。マンゴー、スイカもおいしかったです。）

だいぶ長くなりましたので、最後に小ネタを一つ書いて終わりにします。
カンボジアで最も知られている日本語は何だと思いますか？

正解は『味の素』です。

カンボジアに同社の工場がありますが、アジア地域で調味料として古くから知られており、おそらくテレビ等のコマーシャルで社名が音声付きで流れているのでしょう。現地の人との会話で、こんなことが何度もありました。

「Where are you from?」
「From Japan!」
「Oh, Ajinomoto-!!」

飲みの席で「乾杯」のかわりに「アジノモトー」と言ってくるのに最初は閉口しましたが、慣れてきたら率先して「アジノモトー！」とはしゃいでいる我々は、異国文化を受け入れグローバル人材に近づいたと言っていいはずです、

多分…

【執筆者】
柳 恵太（やなぎ けいた）
グローバルナレッジネットワーク株式会社
サービス戦略本部 本部長

ソフトウェアベンダー、メーカーにて主に移動体通信システム開発のエンジニアおよびプロジェクトマネージャを経て、2005 年にグローバル ナレッジ ネットワークに入社。新サービス立ち上げや技術者育成カリキュラムの企画・開発・実施、大型プロジェクトのマネジメント等の業務を経て、2011 年 9 月から現職。
現在は、サービス企画、マーケティング、海外展開等を推進する部門を統括。

【グローバルナレッジについて】

Global Knowledge.

グローバルナレッジネットワーク株式会社は、世界約 30 か国に展開する IT とビジネススキルのトレーニングプロバイダーです。国内外で活躍するビジネスパーソンに向けて、ヒューマン・スキルやビジネススキル、オリジナル IT トレーニングや IT ベンダーの認定トレーニングを提供しています。

▽あるビジネスマンの「アジア出張記。」はこちらのサイトでもご覧になれます
http://blog.globalknowledge.co.jp/asia/

【情報提供】グローバル ナレッジ ネットワーク株式会社 http://www.globalknowledge.co.jp/